

## 第3章 史跡綴喜古墳群の概要

### 第1節 指定に至る経緯

綴喜古墳群の八幡西車塚古墳、飯岡車塚古墳は、江戸時代の地誌に記載が認められ、地元住民からは上代の墳墓として認識されてきた。

しかし、京都、大阪といった大都市近郊に位置する当地域は、近代から現代にかけて開発圧が強く、明治、大正時代の開墾や高度経済成長期の宅地開発などによって多くの古墳が削平され、現存する古墳も墳丘が一部削られるなどの影響を受けた。

その後、平成10年代から令和のはじめにかけて、天理山古墳群が所在する丘陵の開発計画が立てられた。酬恩庵一休寺にも隣接するこの丘陵を保護するため、地元のNPO法人「一休酬恩会」は、平成19(2007)年に景観保全を目的とした署名活動を展開し、平成23(2011)年には景観買い取り基金を設立しナショナル・トラスト運動を展開した。この運動は、丘陵の保全を広く市民に訴えかけることとなった。

本市が令和3(2021)年に実施した天理山古墳群の試掘調査で、それまで6世紀に位置づけられていた同古墳群が、4世紀中葉の前方後方墳1基と4世紀後葉の前方後円墳2基から構成されることが判明した。綴喜古墳群の歴史的重要性を改めて示す調査成果である。この調査成果を受けて、本市は同古墳群を保存する方針を打ち立てた。

綴喜古墳群で最大の前方後円墳である八幡西車塚古墳は、後円部が史跡石清水八幡宮境内の一部として保護されてきたが、前方部は未指定の状態であった。令和3(2021)年に前方部及び墳丘隣接地で開発の計画が立てられ、保護のための施策が必要となった。

また、他の未指定の古墳については、これまで各所有者が管理して現在に至っているが、所有者の高齢化が進んで世代交代期に入り、保存の転機を迎えていた。

こうした経緯のなかで、綴喜古墳群を構成する古墳について一体的な保存が必要となつたため、京都府教育委員会は令和3(2021)年10月に有識者から構成される「木津川左岸首長墓群調査専門家会議」を設置し、10月26日、12月10日に会議を開催した。

会議では、綴喜古墳群の位置と構成、地形・地質の特徴を検討するとともに、古墳編年における位置づけを行い、造墓活動は古墳時代前期後葉から中期前葉前半をピークとし、中期前葉後半を最後に大型古墳の造営が終了することを確認した。また、綴喜古墳群の範囲設定が妥当で、完結したひとつまとまりであることを確認した。そして、綴喜古墳群の特徴から同古墳群の有する本質的な価値を抽出した。

会議での検討を踏まえ、綴喜古墳群のうち、既指定の大住車塚古墳を含む条件の整った八幡西車塚古墳、天理山古墳



図36 天理山3号墳北側くびれ部  
埴輪列検出状況(西から)

群、飯岡車塚古墳について、京都府教育委員会において史跡指定の意見具申を行うこととなった。

## 第2節 指定の状況

### (1) 史跡指定告示

#### ○文部科学省告示第143号(※ 当該部分抜粋)

文化財保護法(昭和25年法律第214号)第109条第1項の規定に基づき、次の表の上欄に掲げる史跡に同表の中欄に掲げる地域を追加して指定し、その名称を改めて同表の下欄に掲げるとおりとしたので、同条第3項の規定に基づき告示する。

令和4年11月10日

文部科学大臣 永岡桂子

上 欄		中 欄		下 欄
名 称	関係告示	所 在 地	地 域	名 称
大住車塚古墳	昭和49年文部省告示第107号	八幡西車塚古墳 天理山古墳群 飯岡車塚古墳 京都府八幡市八幡大芝 同 京田辺市薪山垣外 同 京田辺市薪里ノ内 同 京田辺市薪小欠 同 京田辺市飯岡西原	17番、19番1、19番2、33番  1番3のうち実測9532.24平方メートル、1番8のうち実測25748.40平方メートル  108番14、108番15  27番2、29番1のうち実測135.38平方メートル、29番2のうち実測1853.80平方メートル、31番  8番1、8番3  備考 一筆の土地のうち一部のみを指定するものについては、地域に関する実測図を京都府文化財担当部局及び京田辺市文化財担当部局に備え置いて縦覧に供する。	綴喜古墳群 大住車塚古墳 八幡西車塚古墳 天理山古墳群 飯岡車塚古墳

種別：史跡

※ 内容は官報告示の表記のまま。ただし横書きに編集。

名称：(旧名称)大住車塚古墳

(新名称)綴喜古墳群

大住車塚古墳

八幡西車塚古墳

天理山古墳群

飯岡車塚古墳

指定基準：二 貝塚・集落跡・古墳その他この類の遺跡

特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準(昭和 26 年 5 月 10 日文化財保護委員会告示第 2 号、平成 7 年 3 月 6 日一部改正文部省告示第 24 号)による。

所在地：(既指定)京都府京田辺市大住八王寺 14 番 外 9 筆

(新指定)京都府八幡市八幡大芝 17 番 外 3 筆

京都府京田辺市薪山垣外 1 番 3 外 9 筆

指定方法：地番指定

指定面積：57,131.26 m<sup>2</sup> ※1

管理団体：京田辺市(令和 5 年 3 月 16 日文化庁告示第 5 号) ※2

(※ 1 は、史跡綴喜古墳群全体の面積。※ 2 は、史跡綴喜古墳群のうち京田辺市域分のみ。)

## (2) 指定説明文

既指定時の説明文(昭和 49 年 6 月 11 日告示)

大住車塚古墳

南山城、木津川西岸のゆるやかに傾斜する水田地帯にある前方後方墳。全長約 65 メートル、後方部の幅約 35 メートル、西北に向いた前方部の幅約 18 メートル。周囲には、濠のめぐった痕跡があり、その外周は幅約 60 メートル、長さ約 100 メートルの長方形を呈している。墳丘部には、葺石が確認されている。主体部は未調査である。

文化庁監修『月刊文化財』(昭和 49 年 5 月号)より

新指定時の説明文(令和 4 年 11 月 10 日告示)

綴喜古墳群

大住車塚古墳

八幡西車塚古墳

天理山古墳群

飯岡車塚古墳

生駒山地の東斜面にあたる八幡丘陵と田辺丘陵、その南東部にある独立丘陵である飯岡丘陵には、4 世紀中頃から 5 世紀初頭にかけて築造された 10 数基の大型前方後円墳及び前方後方墳と大型の円墳、方墳が分布する。木津川左岸の旧綴喜郡内に分布するこれらの古墳は、共通する規範が認められるなど、一体的にとらえることができる。これらを綴喜古墳群と呼称する。

綴喜郡内的一部の古墳は、『山城志』や『山州名跡志』などの江戸時代の地誌にも記載されており、

明治から大正にかけていくつかの古墳の発掘調査が行われている。明治 35 年(1902)には飯岡車塚古墳後円部から車輪石 4 点、石鉈 24 点等が出土し、大正年間(1912~26)に梅原末治がそれらの調査を実施した。また、大正年間には京都府史蹟調査会により美濃山王塚古墳や大住車塚古墳、大住南塚古墳の調査が行われている。昭和 45 年(1970)には京都府教育委員会が大住車塚古墳の測量調査を実施し、その成果をもとに昭和 49 年に同古墳が史跡に指定された。

綴喜古墳群で現存する主な古墳には、古墳群内でも最も北に所在する墳長約 90 メートルの前方後円墳で銅鏡や石鉈、甲冑等が出土した石不動古墳、墳長約 120 メートルの群内最大の前方後円墳で銅鏡 5 面、鍬形石 2 点、車輪石 10 点等が出土した八幡西車塚古墳、墳長約 52 メートルの方墳であるヒル塚古墳、墳長 76 メートルの帆立貝式前方後円墳で銅鏡や甲冑・武具等が出土した美濃山王塚古墳、墳長約 66 メートルの前方後方墳である大住車塚古墳と、それに隣接して築造された墳長約 71 メートルの大住南塚古墳、墳長約 87 メートルの前方後円墳で車輪石や石鉈等が出土した飯岡車塚古墳、直径 60 メートルの円墳であるゴロゴロ山古墳などがある。

これらの古墳が分布する範囲は南北約 11.5 キロメートルに及ぶが、古墳時代前期後半から中期前半にかけての限られた時期に集中して築造されていること、埋葬施設の内容が判明しているものは、主軸が東西方向となるものが多いこと、猪名川流域で産出した石材を竪穴式石室に用いることなど、古墳群として一定の規範を共有している。また、副葬品として中国製の銅鏡や希少な朝鮮半島系の武器・武具類が多く認められるなどもその特徴として指摘できることから、相互に強い関連性をもつ古墳群として把握することができる。

令和 3 年(2021)、綴喜古墳群の東部の天理山古墳群が所在する丘陵で開発事業が計画された。天理山古墳群は、それまでは古墳時代中期から後期の 4 基の円墳で構成される古墳群とされていたが、この開発事業に先立ち京田辺市が行った部分的な発掘調査により、前方後円墳 2 基、前方後方墳 1 基からなることが明らかとなった。そして、引き続き行われた発掘調査の結果、1 号墳は古墳時代前期後葉から未築造の墳長約 57 メートルの前方後円墳、3 号墳は前期後葉から未築造の墳長 81 メートルの前方後円墳、4 号墳は前期後葉築造の墳長約 42 メートルの前方後方墳であることが明らかになった。また、3 号墳では葺石と埴輪列が確認されている。

この発掘調査の結果、天理山古墳群は旧綴喜郡内に集中的に古墳が築造された時期に、綴喜古墳群の中でも大型の前方後円墳、前方後方墳の空白地帯であった大住南塚古墳、大住車塚古墳と飯岡車塚古墳との間に築かれたことが明らかになった。また、綴喜古墳群内における古墳の築造は、前期後葉に八幡西車塚古墳、大住南塚古墳、天理山 4 号墳、飯岡車塚古墳が築造され、前期後葉から未頃にかけて大住車塚古墳、天理山 1 号墳、天理山 3 号墳が、中期初頭から前葉にかけて石不動古墳と美濃山王塚古墳が築造された可能性が高く、各時期において一定の間隔を保ちながら大型の前方後円墳、前方後方墳が築造されたと考えられる。

古墳時代前期後半は日本列島最大規模の前方後円墳を含む古墳群が、奈良盆地東南部の大和古墳群から奈良盆地北部の佐紀古墳群へと移動する時期にあたる。そして、その要因として奈良盆地北部から木津川、淀川を経由して瀬戸内海へと繋がるルートの重要性が増した可能性が指摘されている。木津川沿いに展開する綴喜古墳群の築造は、佐紀古墳群の築造時期にはほぼ重なっており、大王墓を含む古墳群の動向との関連性が認められる。このように綴喜古墳群は、大王墓の移動にみられる王権中枢の動向が地域首長に及ぼした影響を、ヤマト政権直近の地において明瞭に示しており、当時の政治的、

社会的な情勢を考える上で重要である。よってすでに指定されている大住車塚古墳に加えて、条件の整った八幡西車塚古墳、天理山古墳群、飯岡車塚古墳を追加指定するとともに、名称を「綴喜古墳群」に変更し、保護の万全を図るものである。

文化庁監修『月刊文化財』(令和4年9月号)より

※ 令和6年10月11日付け告示(文部科学省告示第146号)により、八幡西車塚古墳の一部(八幡市八幡大芝18番)が追加指定され、令和7年2月現在の史跡綴喜古墳群の面積は57,226.26m<sup>2</sup>である。

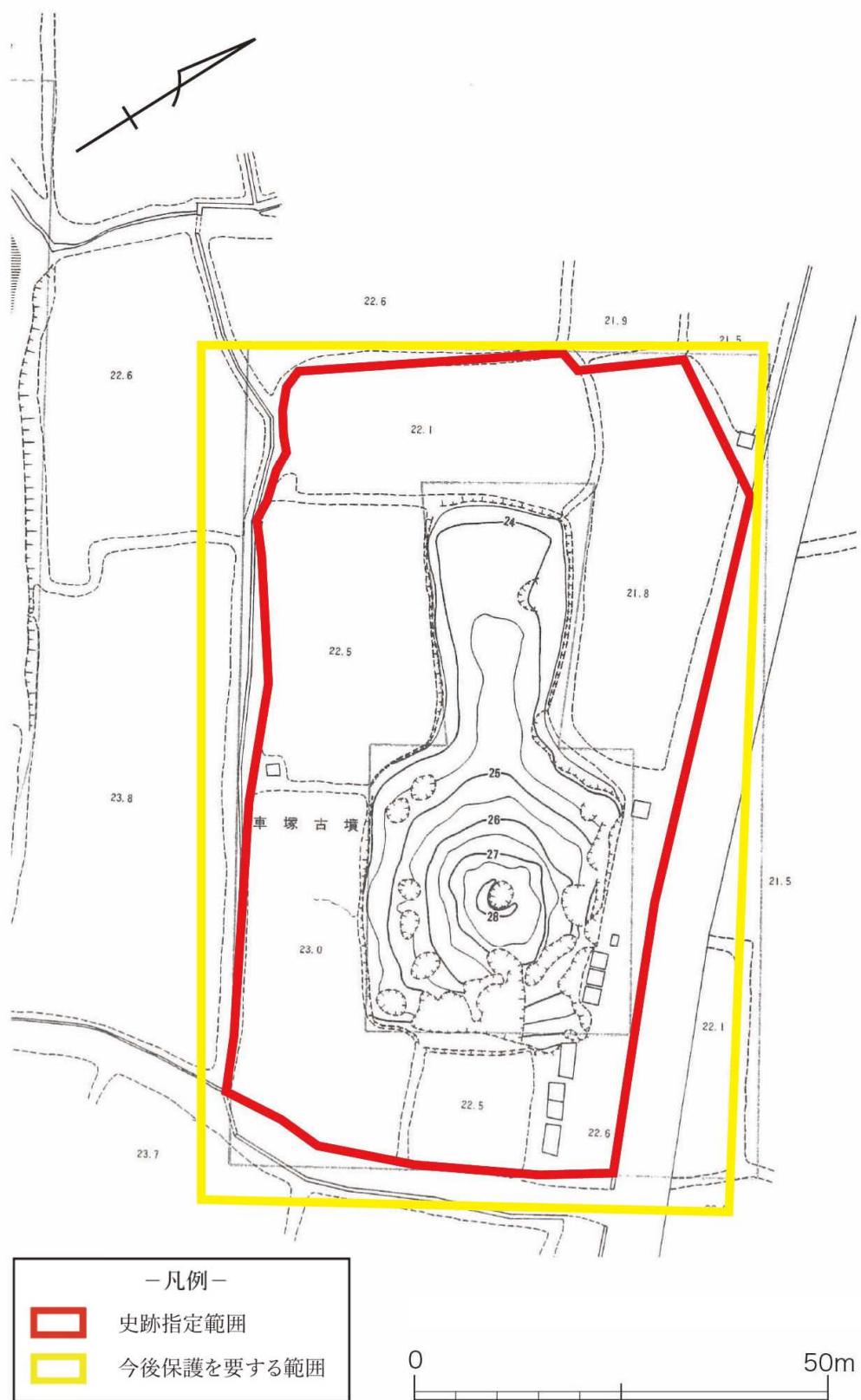


図 37 大住車塚古墳 史跡指定範囲

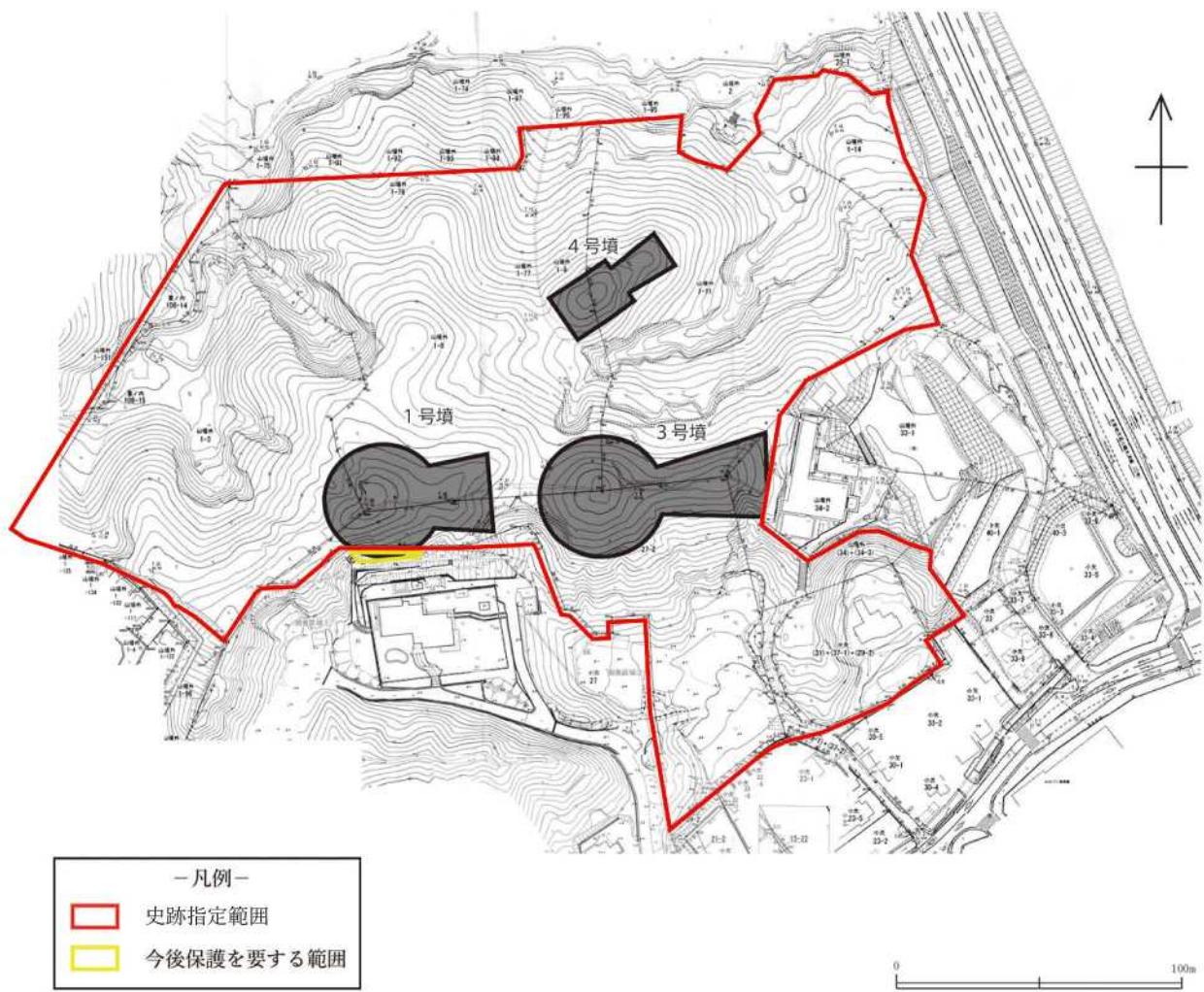


図 38 天理山古墳群 史跡指定範囲



図 39 飯岡車塚古墳 史跡指定範囲

### 第3節 土地の状況

史跡綴喜古墳群の指定地面積は 57,226.26 m<sup>2</sup>である。そのうち京田辺市域分の面積は 51,177.41 m<sup>2</sup>で、市有地が 50,418.41 m<sup>2</sup>(大住車塚古墳、天理山古墳群)、民有地が 759.00 m<sup>2</sup>(飯岡車塚古墳)となっている。また、地目別面積は田 3,359.00 m<sup>2</sup>(6.56%)、山林 46,763.44 m<sup>2</sup>(91.38%)、宅地 894.59 m<sup>2</sup>(1.75%)、公衆用道路 135.38 m<sup>2</sup>(0.26%)、雑種地 25.00 m<sup>2</sup>(0.05%)である。

表9 史跡綴喜古墳群地籍一覧表

#### 大住車塚古墳

地番		地目	面積(m <sup>2</sup> )	所有区分	備考
大住八王寺	14番	田	732.00	市有地	
大住八王寺	15番	山林	1,777.00	市有地	
大住八王寺	17番	田	358.00	市有地	
大住八王寺	17番1	田	768.00	市有地	
大住八王寺	17番2	雑種地	25.00	市有地	
大住八王寺	17番4	田	50.00	市有地	
大住八王寺	19番1	田	1,043.00	市有地	
大住八王寺	19番2	田	365.00	市有地	
大住八王寺	19番3	田	1.00	市有地	
大住八王寺	21番1	田	42.00	市有地	
合 計			5,161.00		

#### 天理山古墳群

地番		地目	面積(m <sup>2</sup> )	所有区分	備考
薪山垣外	1番152	山林	9,532.24	市有地	※旧1番3のうちの一部
薪山垣外	1番153,154	山林	25,748.40	市有地	※旧1番8のうちの一部
薪里ノ内	108番14	山林	341.00	市有地	
薪里ノ内	108番15	山林	28.00	市有地	
薪小欠	27番2	山林	6,724.00	市有地	
薪小欠	29番3	公衆用道路	135.38	市有地	※旧29番1のうちの一部
薪小欠	29番4	山林	1,853.80	市有地	※旧29番2のうちの一部
薪小欠	31番	宅地	894.59	市有地	
合 計			45,257.41		※一部分筆により変更

#### 飯岡車塚古墳

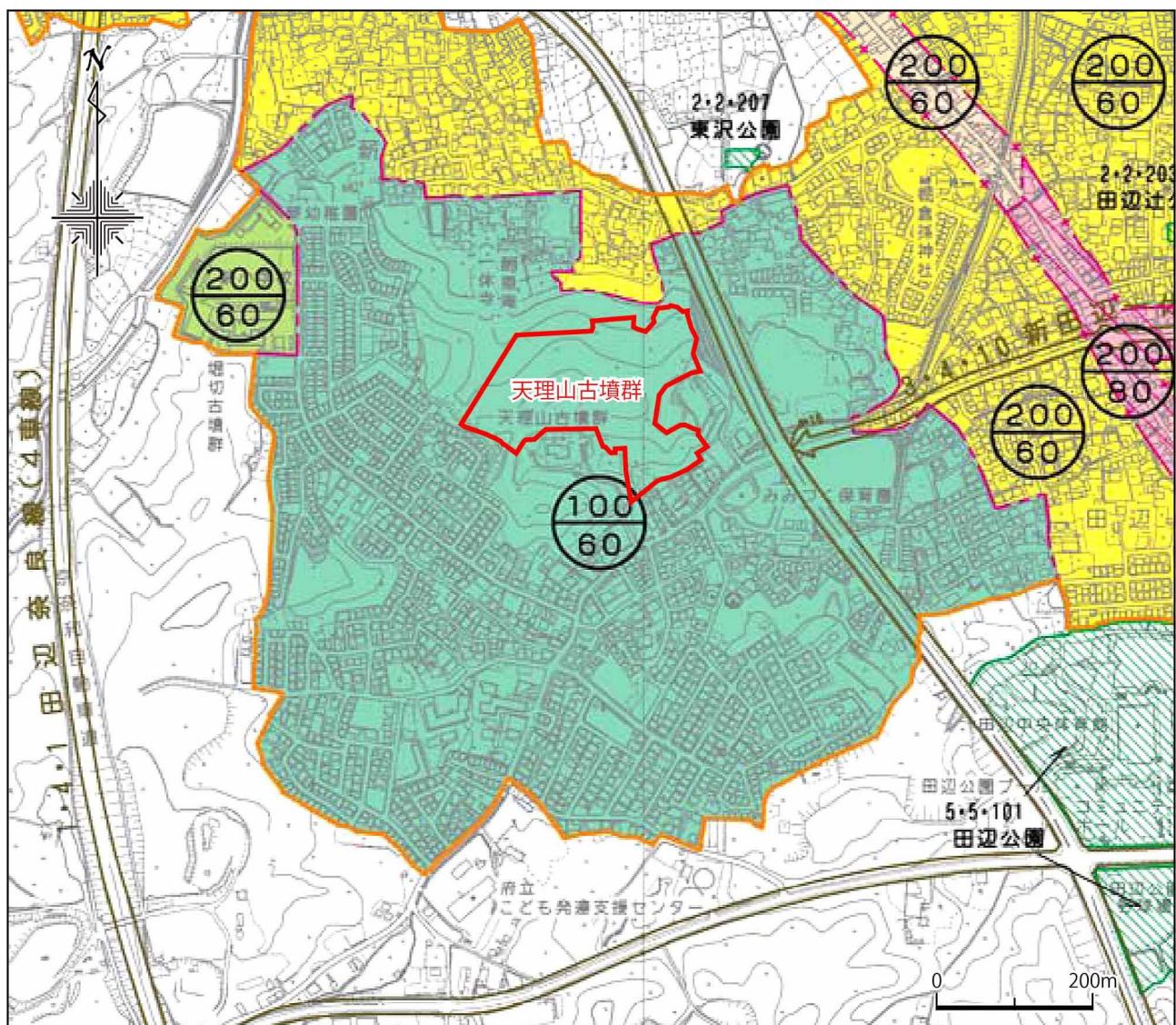
地番		地目	面積(m <sup>2</sup> )	所有区分	備考
飯岡西原	8番1	山林	462.00	民有地	
飯岡西原	8番3	山林	297.00	民有地	
合 計			759.00		

## 第4節 各種法令による位置づけ

史跡綴喜古墳群における関連の法規制については下記表のとおりである。

表 10 関係法令一覧

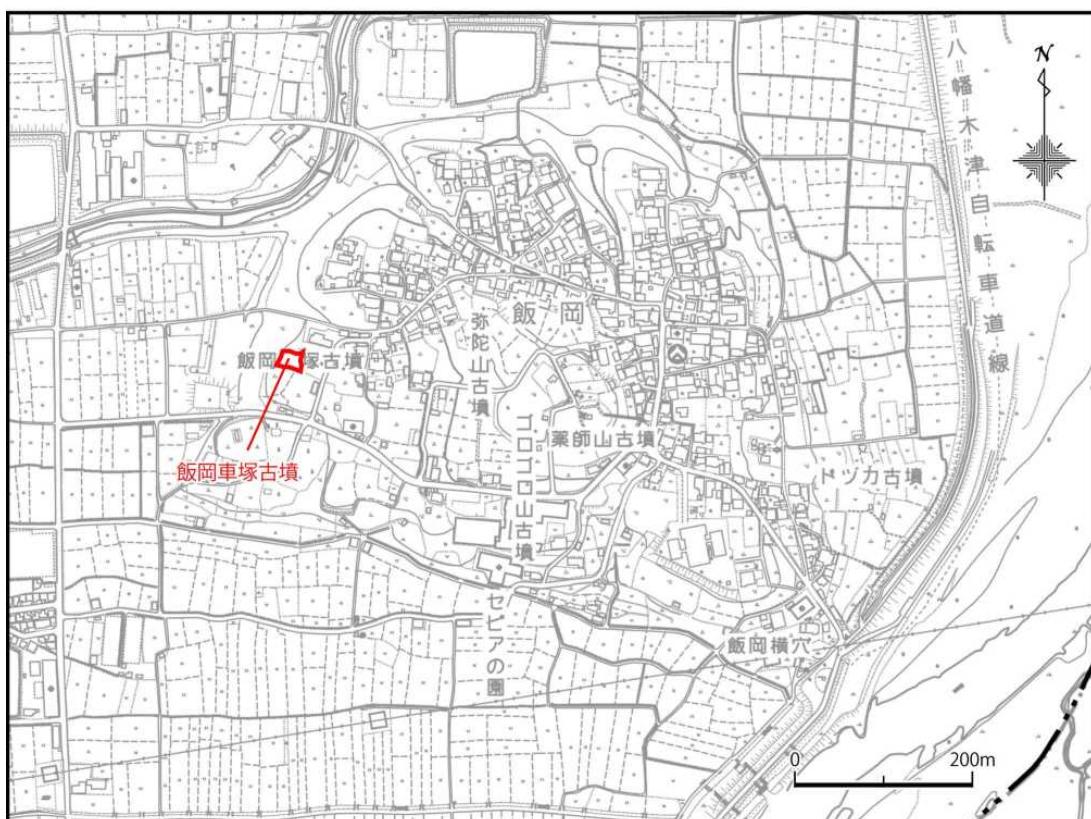
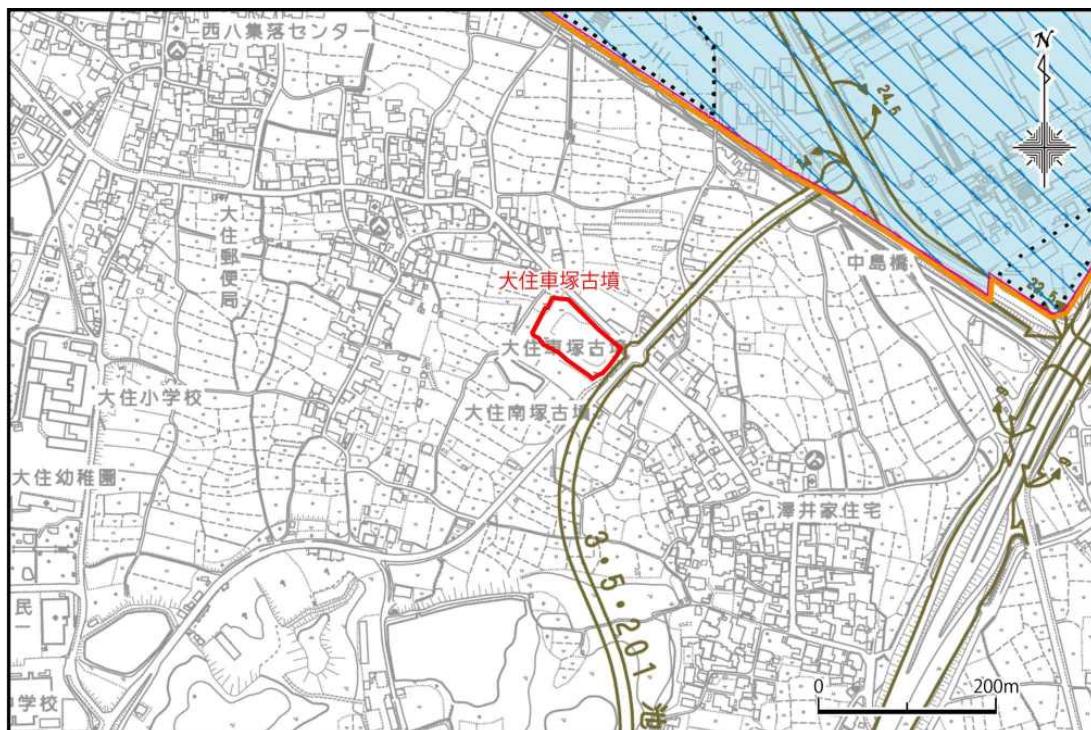
法規制の種類	内 容	所管
文化財保護法	綴喜古墳群は令和4年11月10日に史跡に指定されており、 <b>史跡範囲内における現状変更は文化庁長官の許可が必要</b> である。	文化庁
都市計画法	史跡範囲内における都市計画区域内の地域、地区又は街区は下記のとおりである。 天理山古墳群は、用途地域の <b>第1種低層住居専用地域</b> に該当する。また、 都市緑地法に基づく <b>特別緑地保全地区の指定を検討する</b> 。 大住車塚古墳は、南東に面する土地が <b>都市計画道路予定地</b> となっている。 大住車塚古墳及び飯岡車塚古墳は <b>市街化調整区域</b> に所在している。	国土交通省
土砂災害対策に関する法律等	砂防法 史跡範囲内及び隣接地では、砂防指定地に該当する箇所は無い。	
	土砂災害防止法 天理山古墳群の史跡範囲内及び隣接地に <b>土砂災害警戒区域(土石流・急傾斜の崩壊)</b> 及び <b>土砂災害特別警戒区域(土石流・急傾斜地の崩壊)</b> の指定箇所がある。	
	土砂災害危険箇所 史跡範囲内及び隣接地では、土石流危険渓流及び急傾斜地崩壊危険箇所に該当する箇所が無い。	
	地すべり等防止法 史跡範囲内及び隣接地では、地すべり防止区域の該当箇所は無い。	
	急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律 史跡範囲内及び隣接地では、急傾斜地崩壊危険区域の該当箇所は無い。	
農業振興地域の整備に関する法律(農振法)	史跡範囲内には該当箇所は無い。	農林水産省
鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律	天理山古墳群の史跡範囲内及び隣接地は <b>「甘南備山鳥獣保護区」に指定されている</b> 。また、大住車塚古墳及び飯岡車塚古墳の史跡範囲内及び隣接地は <b>「京田辺特定獣具使用禁止区域(銃)」に指定されている</b> 。	環境省
都市緑地法	天理山古墳群については、 <b>特別緑地保全地区の指定を検討する</b> 。	国土交通省
京都府文化財保護条例	天理山古墳群の隣接地は、 <b>酬恩庵文化財環境保全地区に指定されている</b> 。	京都府
京都府景観条例	史跡範囲内及び隣接地には、京都府景観条例に基づく京都府景観計画における <b>景観計画区域に指定された箇所はない</b> 。ただし、飯岡車塚古墳の所在地は、 <b>京都府景観資産登録地区「玉露の郷・京田辺飯岡～丘陵地に広がる覆下茶園と集落の景観～」に登録されている</b> 。	京都府



■ 第一種低層住居専用地域 ■ 近隣商業地区 ■ 第一種住居地域 ■ 市街化区域  
 ■ 第一種中高層住居専用地域 ■ 第二種住居地域 ■ 都市計画公園 ■ 史跡指定範囲  
 ※ 以外は市街化調整区域

図 40 都市計画図(用途地域) [天理山古墳群]

(京田辺市都市計画を使用、一部加筆)



■ 工業専用地域 ■ 特別工業地区 ■ 市街化区域 ■ 史跡指定範囲

※ 以外は市街化調整区域

図 41 都市計画図(用途地域) [大住車塚古墳 (上段)、飯岡車塚古墳 (下段)]

(京田辺市都市計画図を使用、一部加筆)

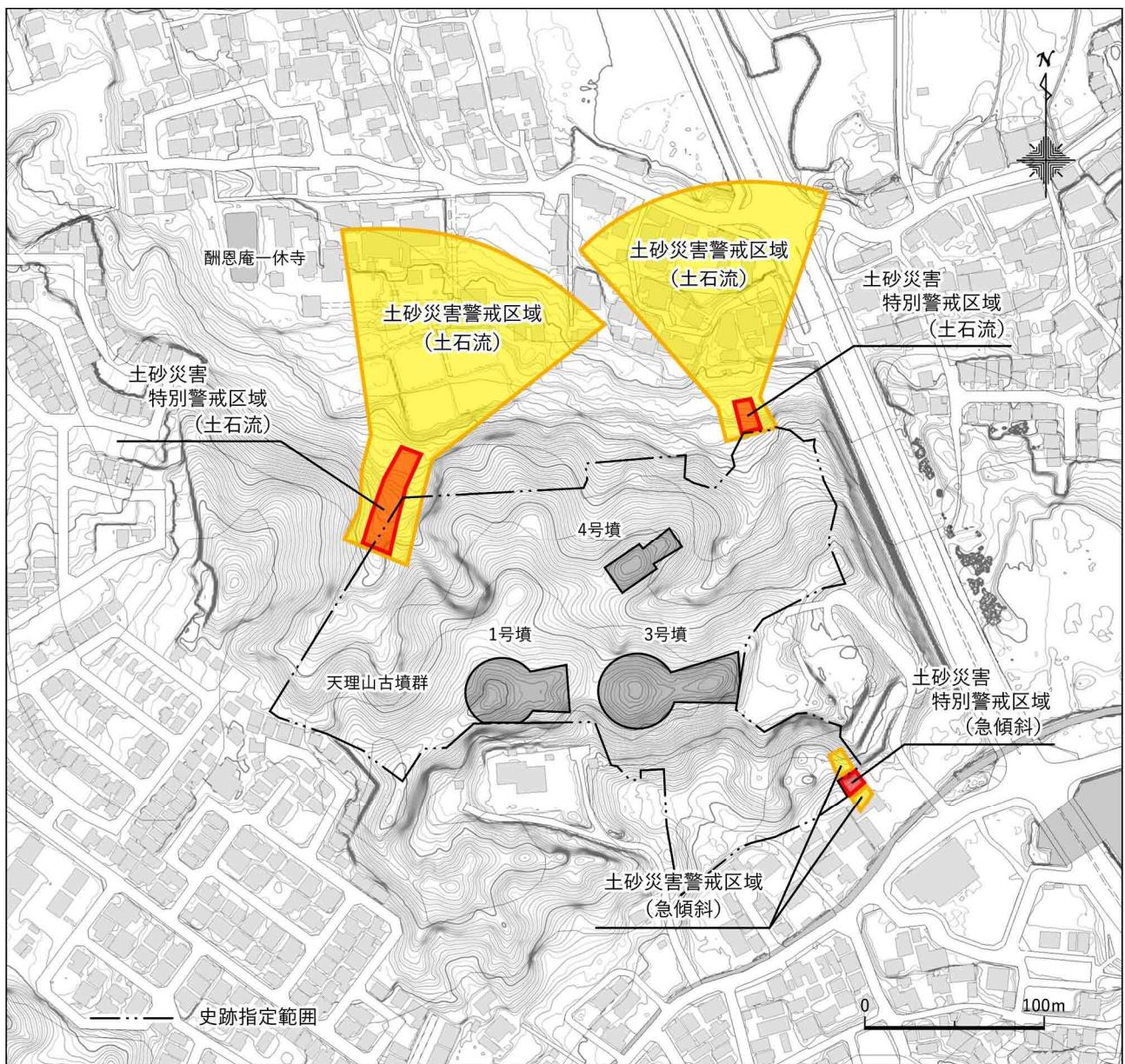


図 42 天理山古墳群 土砂災害特別警戒区域及び土砂災害警戒区域  
(国土交通省国土地理院の航空レーザ測量データを使用し作成)

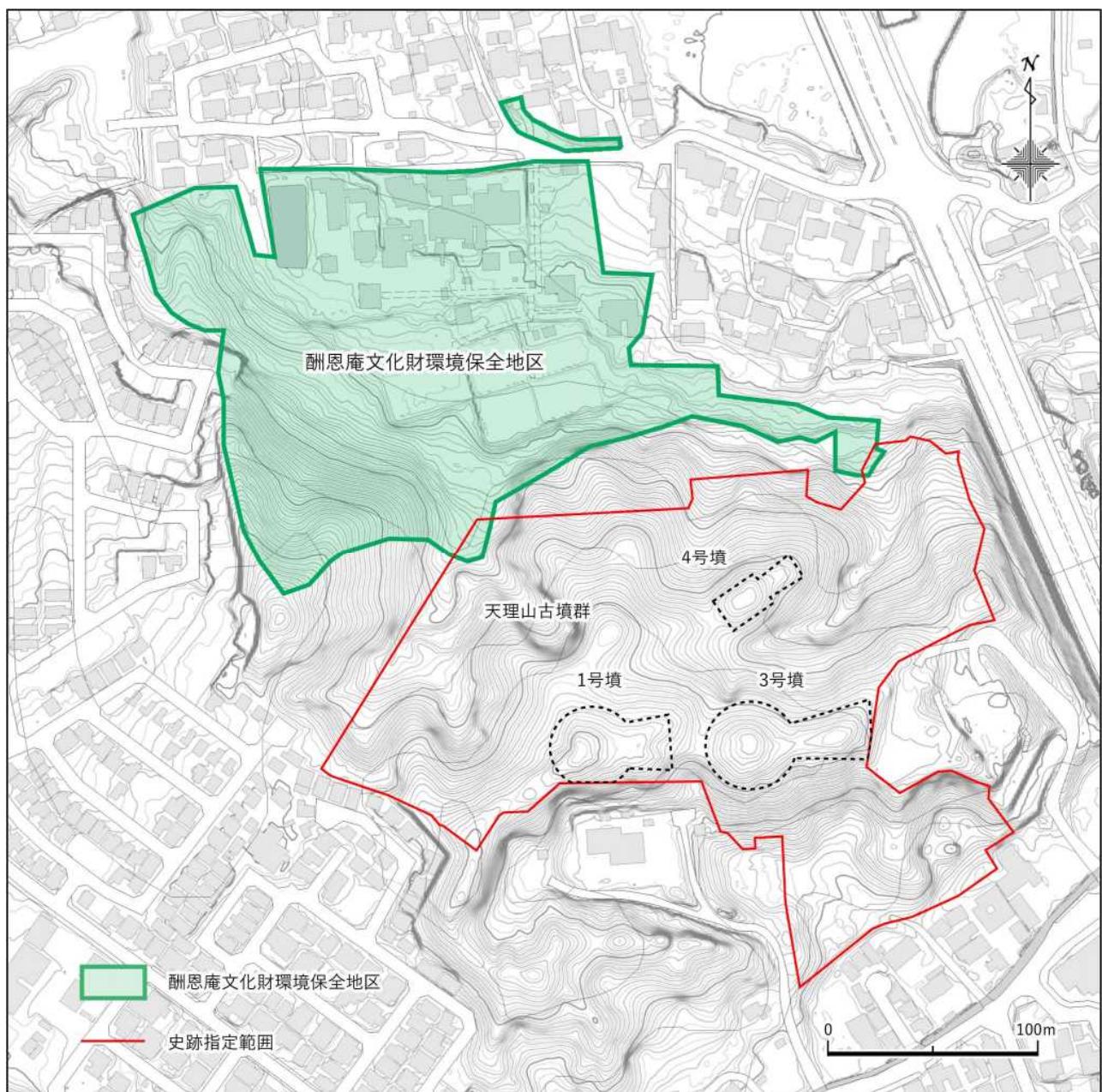


図 43 酬恩庵文化財環境保全地区  
(国土交通省国土地理院の航空レーザ測量データを使用し作成)

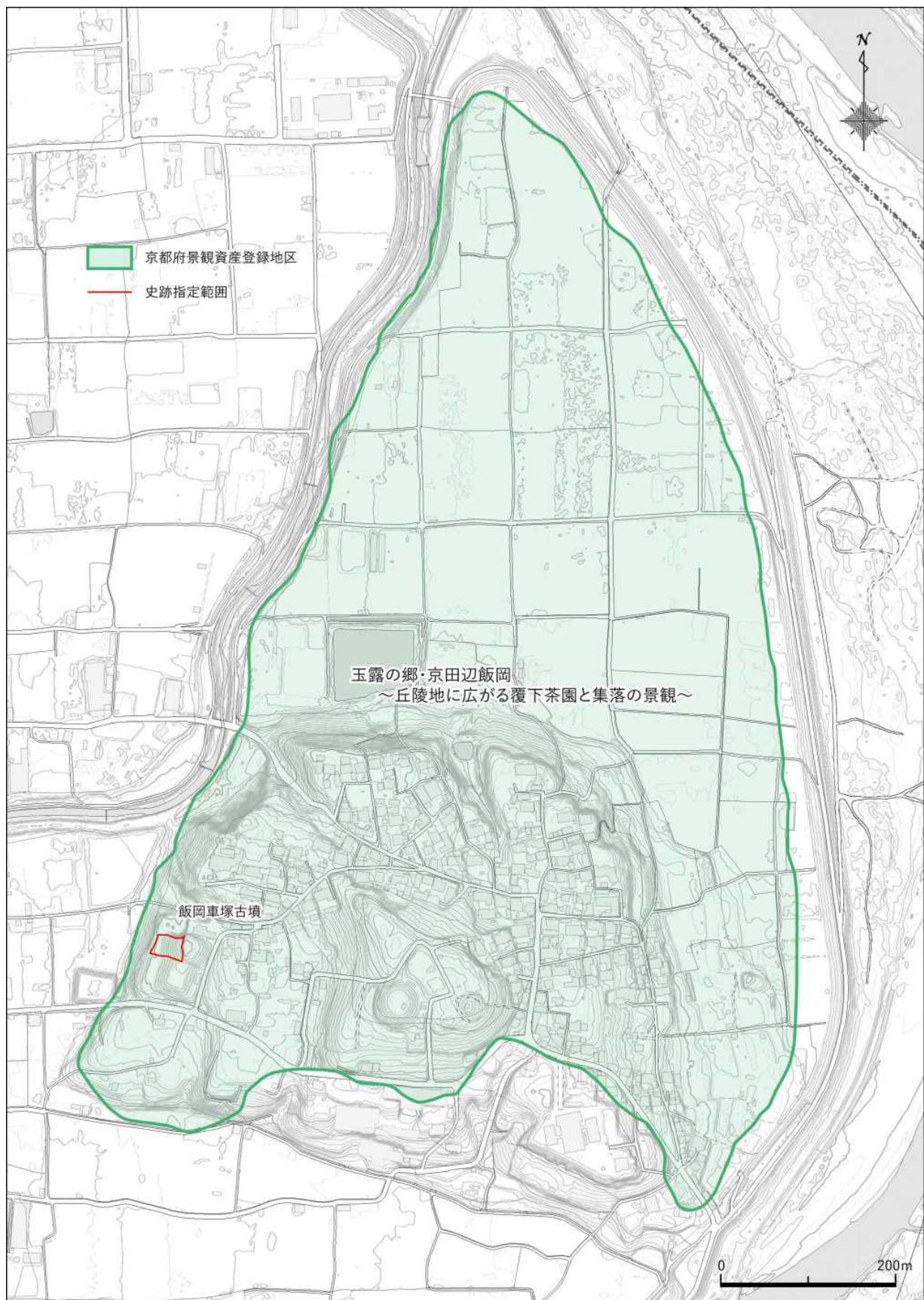


図 44 京都府景観資産登録地区(参考資料：京都府景観資産登録地区保存活用計画書)  
(国土交通省国土地理院の航空レーザ測量データを使用し作成)

## 第5節 史跡綴喜古墳群の概要

### 大住車塚古墳

立地 緩傾斜地 標高 28m 現況 完存

墳形 前方後方墳 周溝 あり

後方部段築 不明 前方部段築 不明

墳長 66m

外表施設 葦石 墳輪

埋葬施設 竪穴式石室または粘土槨か

主な副葬品 不明

**概要** 大住車塚古墳は標高 28mの緩傾斜地に立地する前方後方墳である。昭和 49(1974)年 6 月 11 日に国史跡として指定(文部省告示第 107 号)され、現在は市有地である。別名チコンジ山(智光寺山)古墳とも呼ばれる。大住車塚古墳から南西約 65mの地点に、大住南塚古墳が位置している。また大住車塚古墳の南東側には姫塚古墳(円墳)があり、陪塚とみられている。

**調査経過** 大正 11(1922)年、京都府史蹟勝地調査会が現地踏査を行った。その報告では葦石を有する前方後円墳であると認識されていたが(梅原 1922)、昭和 45(1970)年に改めて京都府教育委員会によって測量調査が実施された。測量図を基に龍谷大学が昭和 47(1972)年に報告を行い、墳丘長 66mの前方後方墳と位置付けた(万波 1972)。その後調査は行われていないが、平成 18 (2006)年に前方部墳頂で埴輪片が採集されている。

**墳丘の形態・外表施設** 大住車塚古墳は墳丘長 66m、前方部幅 18m、後方部一辺 30m、前方部の高さ 1.5m、後方部の高さ 4.5mを測る。

**歴史的価値** 南東に位置する大住南塚古墳と同規模の前方後方墳であり、2 基が並列する前方後方墳として非常に貴重である。



図 45 大住車塚古墳測量図



図 46 大住車塚古墳 現況(南から)

## 天理山 1 号墳

立地 丘陵 標高 92m 現況 完存

墳形 前方後円墳 周溝 なし 段築 あり

墳長 57m

外表施設 増輪

埋葬施設 伝 粘土櫛

主な副葬品 不明

概要 天理山古墳群は国指定名勝庭園を有する酬恩庵一休寺の裏山に所在する古墳群である。古墳群は 3 基の古墳で構成されており、そのうち天理山 1 号墳は標高 92m に位置する前方後円墳である。敷地内は山林や竹林で覆われている。丘陵の周辺は近年の宅地造成により開発が進んでいる。天理山 1 号墳は、天理山 3 号墳と同一丘陵に位置しており、天理山古墳群の中でもっとも高い場所に位置している。後円部西側は搅乱を受けており、土砂掘削によるものと推測される。

調査経過 天理山古墳群は、昭和 31(1956)～34(1959)年に田辺郷土史会によって行われた分布調査により確認された。その際 1 号墳からは「3 型式の須恵器高杯の破片と円筒埴輪の一部分」が採取されたとの記述がみられる(田辺郷土史会編 1956)。その後京都府教育委員会によって昭和 36(1961)年に行われた分布調査で、1 号墳の墳頂には浅い窪みがみられ、後円部の削平を受けている断面には粘土櫛が露出しているとの記述がある。令和 3(2021)年、宅地造成計画により本市が試掘調査を実施し、前方後円墳であることが明らかになった(京田辺市編 2022)。

墳丘の形態・外表施設 天理山 1 号墳は墳丘長 57m、後円部直径 38.6m、最大高 5m を測り、地山を削り出して造られた古墳である。

葺石や転落石を検出していないこ

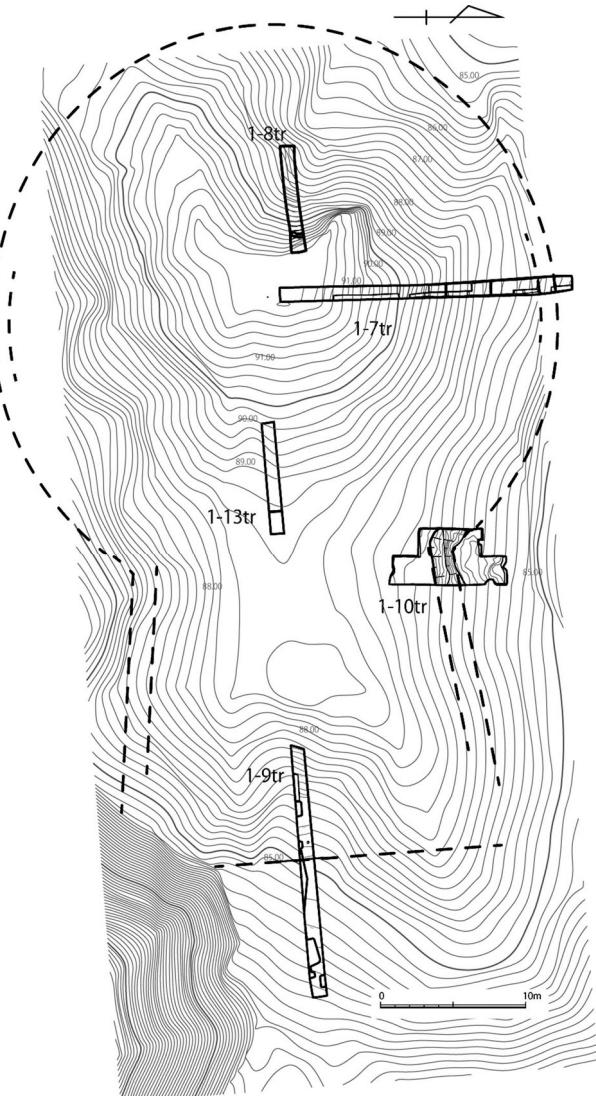


図 47 天理山 1 号墳測量図

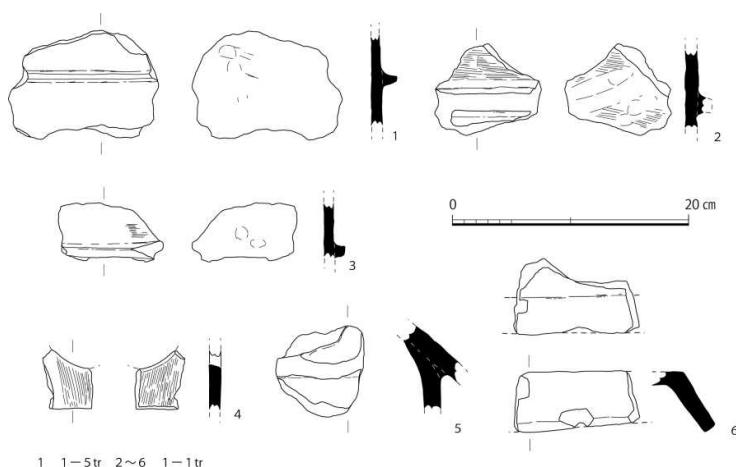


図 48 天理山 1 号墳出土埴輪

とから、もとより葺石は施していなかったと考えられる。墳丘からは円筒埴輪と形象埴輪(家形埴輪)の破片が出土しているが数量は少なく、墳頂にのみ埴輪を樹立していた可能性が高い。

**歴史的価値** 天理山1号墳は京都盆地や木津川を一望できる丘陵の最高所に築造されており、天理山古墳群の中でもっとも標高の高い位置に築造されている。東側には葺石と埴輪列を有する天理山3号墳が位置しており、その立地から双方は深い関係にあると考えられる。

### 天理山3号墳

立地 丘陵 標高 86m 現況 完存

墳形 前方後円墳 周溝 なし 段築 3段か

墳長 82m

外表施設 葦石 墓輪

埋葬施設 不明

主な副葬品 不明

**概要** 天理山3号墳は標高86mに位置する前方後円墳であり、天理山1号墳の東隣に位置している。墳丘は一部形が崩れているが、比較的良好に遺存している。

**墳丘の形態・外表施設** 天理山3号墳は墳丘長82m、後円部直径42m、最大高7.6mの規模を有する前方後円墳である。丘陵の地山を削り出した上に盛土を施して造られており、外表施設として葺石および埴輪列を有している。基底石は長辺約30cmで、長軸を横向きに配置している。葺石は約15cmであり、古墳の斜面と平坦面に施されている。埴輪列は墳丘北側のくびれ部平坦面で検出した。令和3年度の調査では、後円部側に4本、くびれ部に1本、前方部に1本の円筒埴輪列を検出している。埴輪は直径が約40cmを測り、0.8~1mの間隔で樹立されている。くびれ部付近には朝顔形埴輪の破片が出土していることから、くびれ部には朝顔形埴輪を樹立していたと考えられる。また前方部北側裾付近から埴輪棺を1基検出している。

**歴史的価値** 外表施設や時期が判明している事例として貴重である。天理山古墳群の周辺では以前から後期古墳が多く知られていたが、今回新たに前方後円墳が存在することが判明した。飯岡車塚古墳を除き、墳丘長70m

を超える古墳は確認されていなかったが、天理山3号墳が新たに発見され、木津川左岸の有力首長墓系譜をたどるにあたり非常に重要である。また後円部墳頂には盗掘や陥没とみられる痕跡がなく、主体部が遺存している可能性がある。

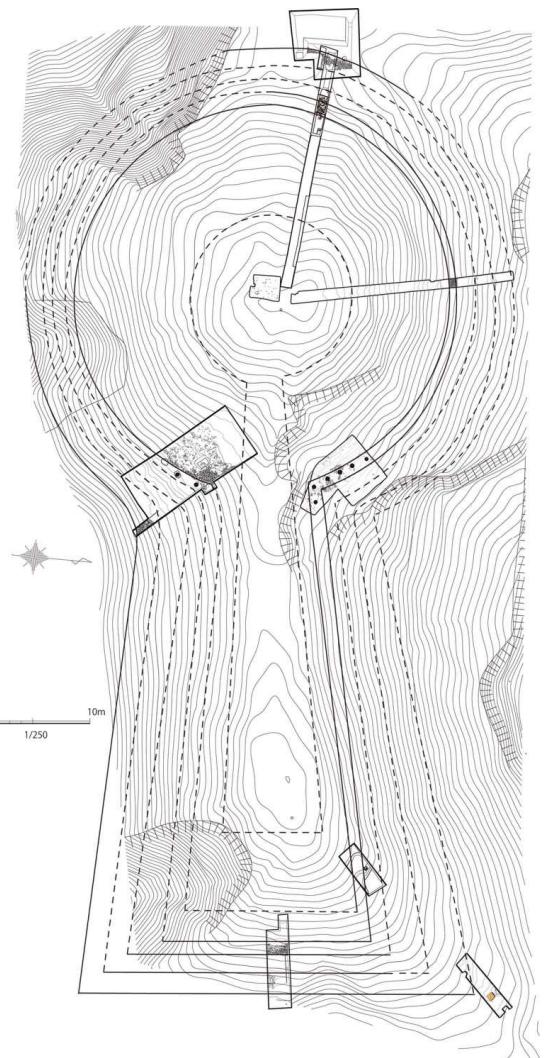


図49 天理山3号墳測量図

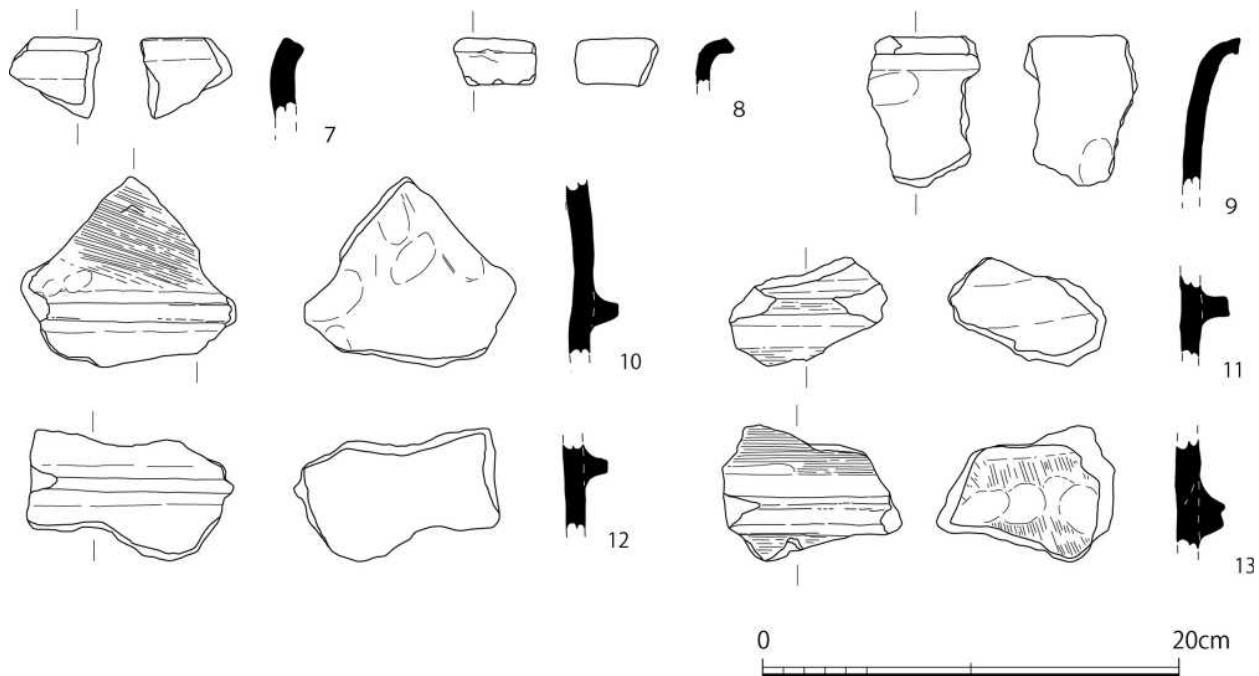


図 50 天理山 3 号墳出土埴輪

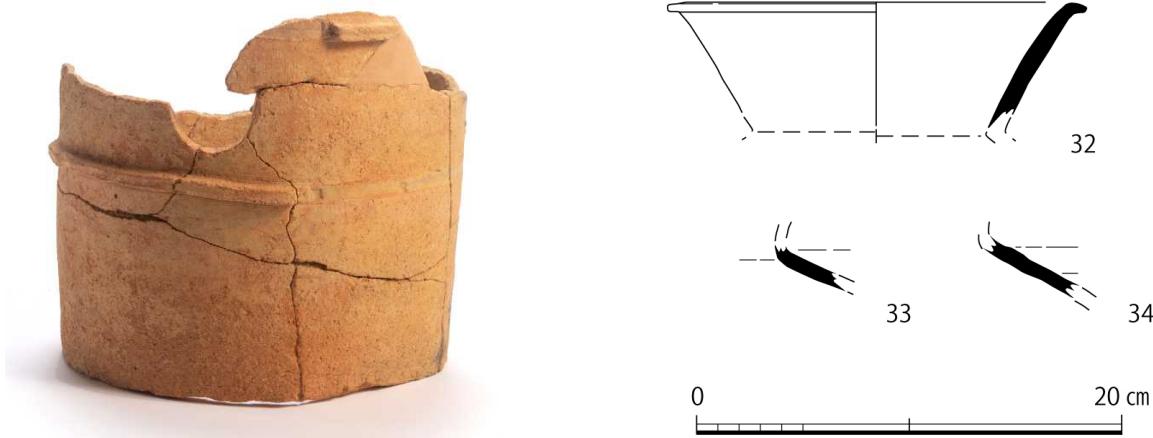


図 51 天理山 3 号墳北側くびれ部出土埴輪

図 52 天理山 3 号墳出土土器

#### 天理山 4 号墳

立地 丘陵 標高 76m 現況 完存 墳形 前方後方墳 周溝 なし 段築 なし

墳長 42m 外表施設 なし 埋葬施設 粘土櫛または木棺直葬 主な副葬品 不明

概要 天理山 4 号墳は標高 76m に位置する前方後方墳である。1 号墳と 3 号墳が位置する丘陵から北側に谷を挟んで独立して位置する。墳丘は良好に遺存しており、現状は竹林である。

墳丘の形態・外表施設 天理山 4 号墳は墳丘長 42m、後方部一辺 23m、前方部幅 14m、最大高 6m を測り、地山を削り出して造られた古墳である。葺石や転落石、埴輪の検出はなく、築造当初から葺石と

埴輪を施していなかったと考えられる。墳頂からは土師器が出土している。

埋葬施設 粘土槨または木棺直葬である。墓坑は墳丘の主軸にほぼ沿っており、その規模は長辺 6.3m、短辺 3.7m である。

歴史的価値 墓坑を有しておらず、段築もないこと、土師器に古い様相が認められることから、群中最古の古墳である可能性が高い。

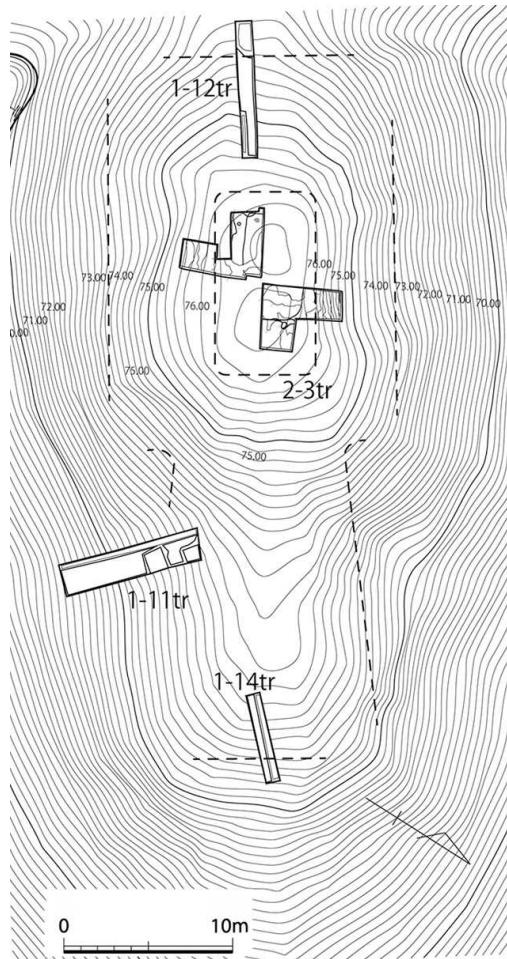


図 53 天理山 4 号墳測量図

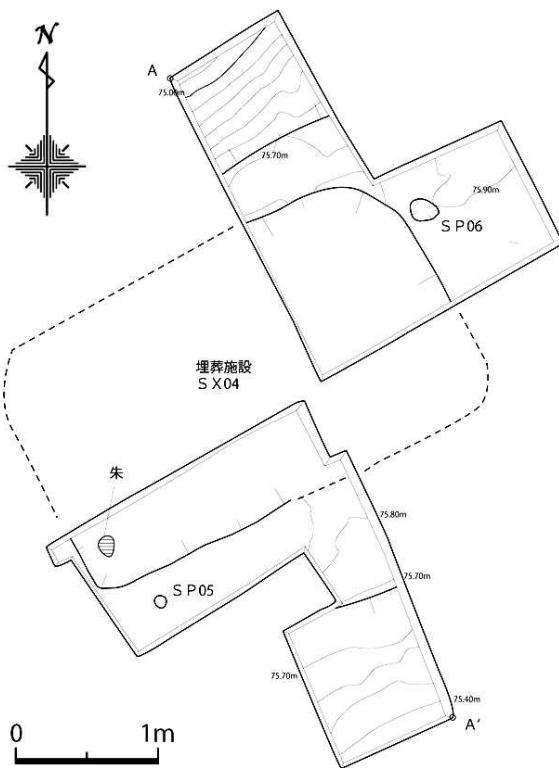


図 54 天理山 4 号墳墓壙平面図

### 飯岡車塚古墳

立地 独立丘陵 標高 27m 現況 完存 墳形 前方後円墳 周溝 あり 段築 三段か

墳長 90m 外表施設 草石 墓輪 埋葬施設 竪穴式石槨 主な副葬品 腕輪形石製品 石製容器類 玉類 刀劍破片

概要 飯岡車塚古墳は墳丘長 90m の飯岡古墳群の中で最大かつ唯一の前方後円墳である。現在前方部は茶畠、後円部は竹林の荒地となっている。

調査経過 大正 8(1920)年に京都府史蹟勝地調査会によって報告された。明治 35(1902)年に後円部が発掘された際には、「塚ノ全面ハ今開墾サレテ密柑畠トナリ」とあり(梅原 1920)、当時から開墾されていた様子が伺える。また当時より後円部の中心付近に石碑が建っており、竪穴式石槨の割石が散在していたようである。石製品などの多様な副葬品が出土している。その後、昭和 13(1938)年、日本古文化研究

所報告では、墳丘長約81m、後円部径約61m、前方部幅約45~48m、後円部高さ約9mの前方部が開かない前方後円墳と位置付けている(梅原 1938)。その後、昭和51(1976)年に田辺町教育委員会が道路拡張工事のための発掘調査を実施した。後円部東側墳丘裾部分で基底石、葺石および楕円筒埴輪を検出している(吉村 1976)。



図 55 飯岡車塚古墳測量図



図 56 飯岡車塚古墳出土楕円筒埴輪

**墳丘の形態・外表施設** 飯岡車塚古墳は墳丘長90m、後円部径59m、前方部幅48m、最大高12mの前方後円墳である。前方部があまり開かない形状をしている。外表施設は東側墳丘裾で葺石および楕円筒埴輪を検出している。基底石は直径約25cm、葺石は直径約15cmである。楕円筒埴輪は基底石の1.5~1.8m外側に樹立している。楕円筒埴輪は4条5段であり、2段目と4段目に逆三角形の透孔を穿つ。また器壁には赤彩が施されている。周溝は堀割程度のものが存在していたと考えられる。

**埋葬施設** 主軸に沿って割石を小口積みした竪穴式石槨である。石室の規模は長さ約2.4m、幅約1.2m、高さ約1.2mである。石室の底は「砂利と粘土とで固めてあった」とあり(堀 1972)、木棺を置く粘土床であったと思われる。

**副葬品等** 鍬形石1、車輪石4、石鉤24、管玉26、勾玉4、小玉1、脚付小形埴輪1、合子1、刀剣破片1が出土した。

**歴史的価値** 飯岡車塚古墳は京田辺市内最大の前方後円墳である。墳丘の遺存状態が比較的良好で、副葬品が判明している古墳として非常に高い価値を有している。

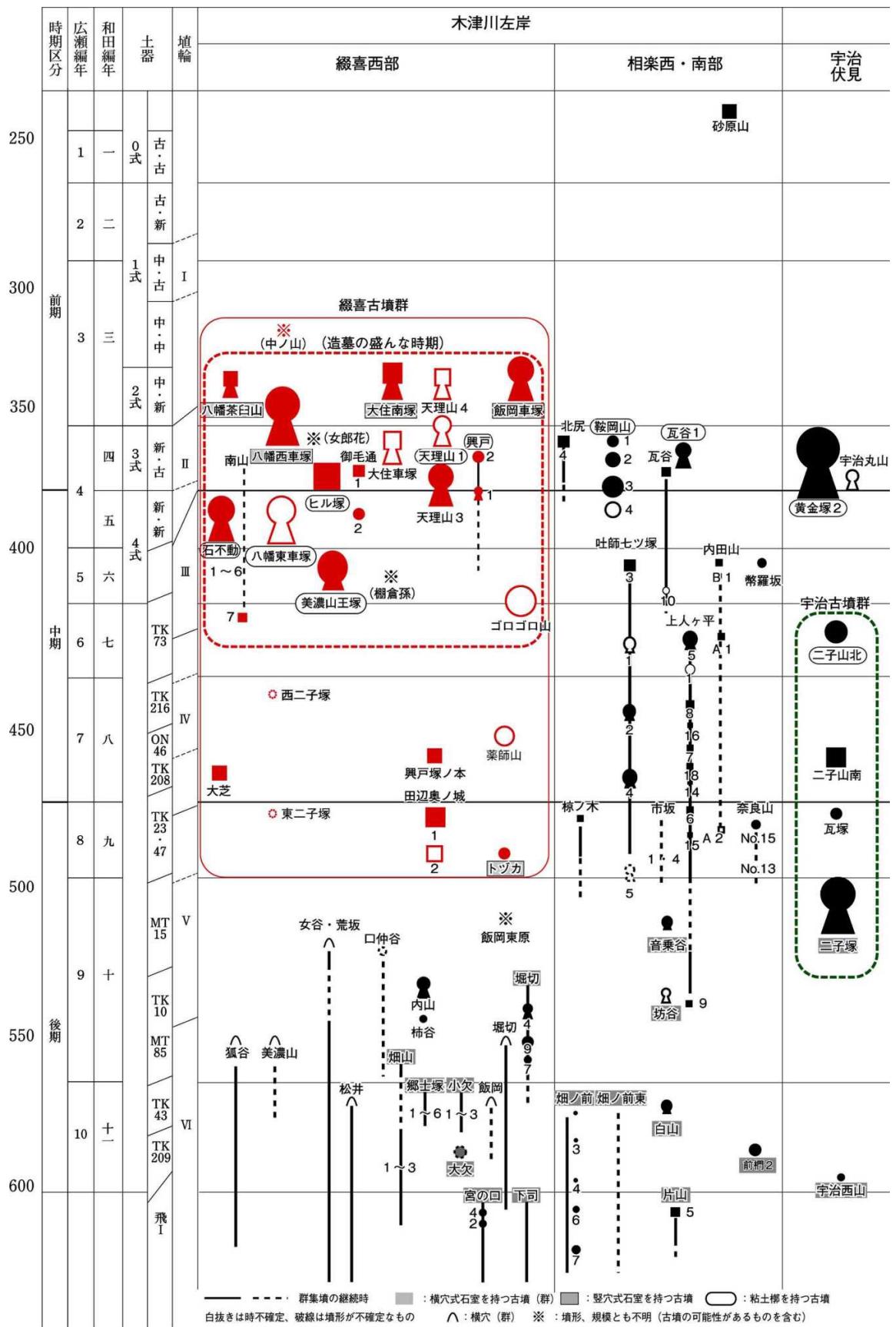
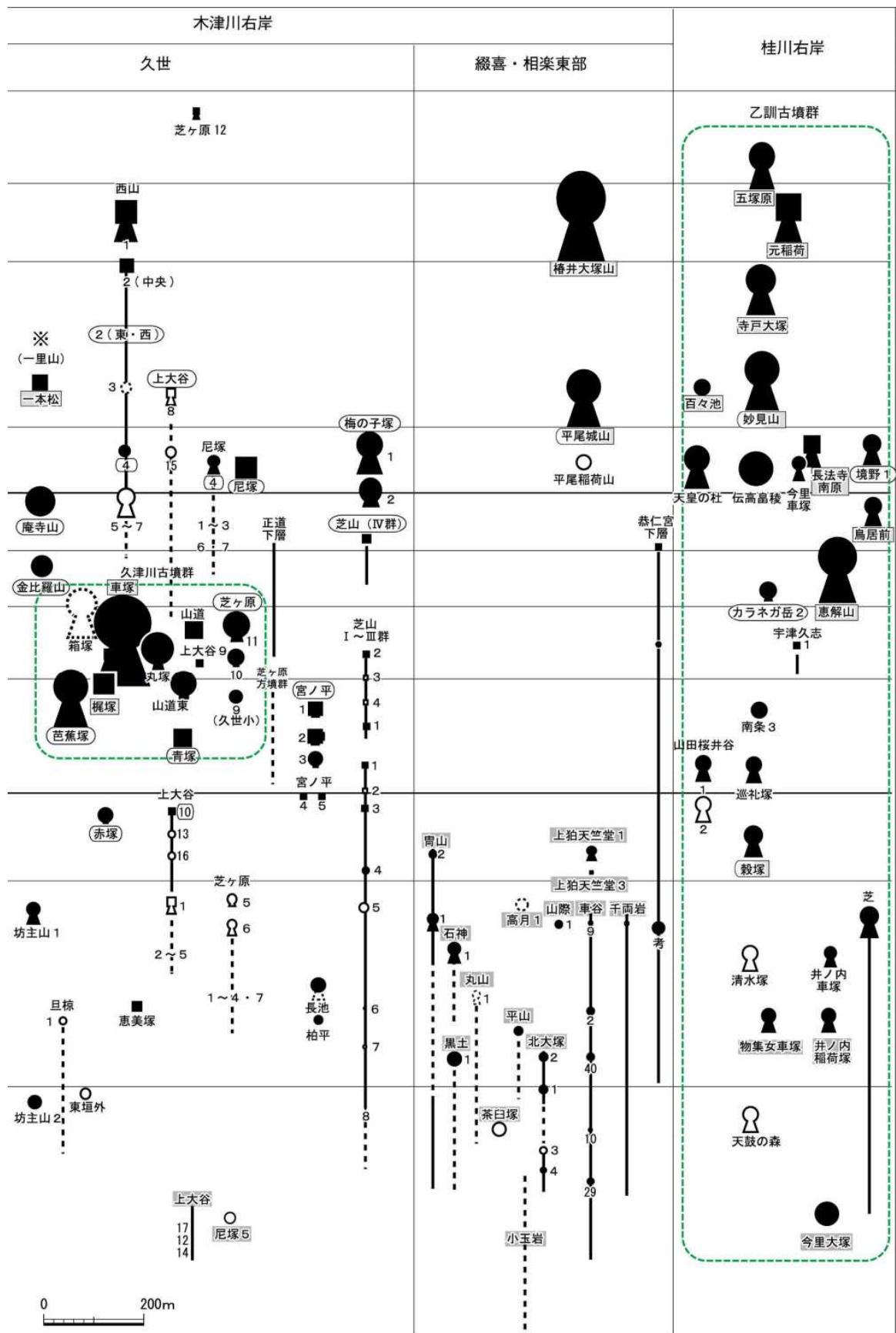


図 57 綴喜古墳群と



赤色：綴喜古墳群（京都府教育委員会『綴喜古墳群調査報告書』2022を一部加筆）

## 近隣の古墳編年

## 天理山2号墳

天理山2号墳については現在その所在を確認できていない。昭和34（1959）年に田辺郷土史会が刊行した『田辺町郷土史 古代篇』には、「1号墳の西15mの山頂部がそれで、今は1号と共に木のない山となっている。大体は1号と同型式と推定される。」（田辺郷土史会 1959）注1との記述がある。また京都府の遺跡台帳にも完存する円墳と記されているが、備考欄には「古墳とは認められなかった（すべて地山である）」との記載が認められる。現在の遺跡地図上では天理山古墳群のうち西端に完存する円墳として登録されている。

令和3（2021）年に2号墳の有無を確認するため調査区を1箇所設定し掘削を行ったが、古墳の痕跡は確認されなかった。

これらのことから、現状2号墳の有無については把握ができない状態であり、今後発掘調査により確認が必要である。

注1 この報告にて、1号墳からは「3型式の須恵器高杯の破片と円筒埴輪の一部分が発見された。」とあり、須恵器が出現する年代（5世紀初頭）と現在の1号墳の築造年代（4世紀後半）に齟齬が生じている。



図58 現在の遺跡地図と2号墳の位置

（京都府自治体情報化推進協議会「遺跡マップ」より抜粋、一部加筆）